OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	和歌山朝鮮初中級学校からみる和歌山在日朝鮮人社会の歴史と現状
Author(s)	沈, チャナ
Citation	平成29年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書. 2018
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68092
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式６

申請先学部　文学部　採択番号　No.　6

平成２９年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書

ふりがな 氏　　名	沈　チャナ	学部 学科	文学部人文学科	学年	２年
ふりがな 共　同 研究者氏名	金　滉	学部 学科	法学部法学科	学年	２年
	金　煌碩		人間科学部		１年
					年

アドバイザー教員 氏名	須藤訓任	所属	文学研究科文化形態論専攻
研究課題名	和歌山朝鮮初中級学校からみる和歌山在日朝鮮人社会の歴史と現状		
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。（先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。）		

序章

本論文は、和歌山の在日朝鮮人社会、特に和歌山朝鮮初中級学校に焦点をあて、その歴史と現状、そして、これからの展望について考察する。

本論文執筆の目的は、①和歌山の朝鮮人社会の事例から在日朝鮮人コミュニティの在り方を考えることと、②和歌山の在日朝鮮人社会の歴史を調べ、資料として残すことにある。

和歌山県には在日朝鮮人の人口が近隣の都道府県に比べても少ないにも関わらず、朝鮮学校を中心とした朝鮮人コミュニティが強く存在する。全国的に朝鮮学校が少なくなり在日朝鮮人コミュニティが縮小していく中で、同胞人口が少ないながら朝鮮学校を中心に脈々と続いてきた和歌山同胞社会の歴史と現状から、在日朝鮮人のコミュニティと民族教育の意義について考えたい。

また、これまで、在日朝鮮人史の研究において、和歌山県にどのようにして朝鮮人が住むようになったかなどの研究が少なく、和歌山の朝鮮人社会を題材にした書籍なども発行されていないことから、今回の研究が新たな資料を残す取り組みとなる。

史料が極めて少ない中、和歌山に何度も足を運び、一世の方々から現役の学校の先生まで、インタビューを通して和歌山同胞社会についての全体像をつかみ、考察することを試みた。本論文は、そうした人たちの協力で成り立っている。それは在日朝鮮人社会全体についてもいえるだろう。在日朝鮮人史研究における史料の欠落は長らく言われている問題であるが、同胞人口の少ない地域となるとより一層そうした傾向がある。マイノリティとして差別されながら生きてきた朝鮮人にとって、自分たちの生活を成り立たすことで尽力し、さらに民族運動に携わる中で、歴史を残すという作業がどれほど困難なことであっただろうか。現在でも学校や団体はギリギリの人員と財源の中運営されており、コミュニティを何とか維持することに全ての力がそそがれている。

そうした中でも論文執筆のために長時間のインタビューに応じてくれ、全面的な協力をしたいただいた朝鮮総聯和歌山県本部と和歌山朝鮮初中級学校、そして多くの同胞の方々のためになりたいと思う。

本論文では、まず、和歌山の在日朝鮮人と民族教育の歴史について述べる。そのうえで、特に和歌山朝鮮初中級学校に焦点を当て、学校の置かれている現状と学校の特徴や強みについて、また、課題を克服するために行われている活動について論じたい。そうすることで、現在提起される在日朝鮮人の民族教育に関する課題について、また、それをどのように克服するかについて、何らかのヒントが得られると考える。各地域によって少しずつ異なった現状と課題はあると思うが、在日朝鮮人の民族教育に対する抑圧が強くなり、同胞の組織離れや民族教育離れが顕著に現れている現状の中、同胞数が極めて少なく規模が小さいながらも脈々と維持されている和歌山朝鮮初中級学校の伝統と実践から考えるべきことは多い。和歌山に訪問するたびに感じたそうした感覚を論理的に整理したいと思う。

第１章　和歌山、在日朝鮮人の歴史

本章では、和歌山県に在日朝鮮人がどのように住むようになり、どのようにして生活していたかを述べる。主な資料としては、「和歌山・在日朝鮮人の歴史」（金静美 『在日朝鮮人史研究』第 14 号収容 1984 年 11 月）を参照した。

第１節　和歌山への渡航の歴史

1900 年代前半、朝鮮人がどのようにして和歌山へと渡ってきたのかを知るためには、まず多くの朝鮮人が日本へと渡ってきた背景について簡単に触れておくべきであろう。現在の日本社会では在日朝鮮人一世は皆、戦時労働動員として強制連行されてきたという誤解が蔓延している。この誤解を解くためにも下記の表 1（『日韓新たな始まりのための 20 章』、田中宏、板垣竜太、2007 年 1 月 30 日）が示す在日朝鮮人の人口の推移に注目したい。1939 年に戦時労働動員として朝鮮人が日本へ強制連行されだしたが、それ以前から在日朝鮮人の人口が大幅に増えていることが明白である。かといって当時の朝鮮人たちが自らの意思で日本へ渡ってきたということではない。当時日本の植民地支配下にあった朝鮮半島では 1910 年から土地調査事業が、1920 年から産米増殖計画が実施され朝鮮半島の農業は大打撃を受けた。これは当時 8 割以上が農業で生計をたてていた朝鮮半島の民衆たちに直接的に影響を与え、生きるために多くの朝鮮人たちが日本へと渡ってくることになった。

在日朝鮮人全体の渡航史をふまえ、和歌山へ移り住んできた朝鮮人に焦点を当てていく。数少ない和歌山在日朝鮮人一世たちの証言から、和歌山に渡ってきた朝鮮人たちは大きく 2 つに分けられる。まずひとつは労働現場に隣接する居住地に住み始めた人々ー大阪の平野川改修工事に従事した朝鮮人の飯場が猪飼野という地域形成のきっかけとなったものと同様であろうー。もうひとつは、1945 年 8 月 15 日の朝鮮半島解放以降に朝鮮半島への帰国を望み、その資金を得るために和歌山に住む縁故を頼って和歌山を訪ねたが、そのまま帰国が叶わず和歌山に居住することになった人々である。前者からみていこう。和歌山において在日朝鮮人が集住する地域のなかでも下津港、海南市、和歌山市南端の 3 つの集住地域で暮らした在日朝鮮人一世の具体的な証言から、当時の状況を読み取っていきたい。1927 年に母とともに 10 才で父の働く日本へ渡ってきた李東康氏（仮名）は“下津、あそこは、浅川組の仕事で、アボジ（朝鮮語で父の意）が最初に飯場を作ったとこです。当時は、そこに住んだ人は全部、浅川組の仕事をした人です。箕島の東亜燃料工事にも、同胞がおおぜい従事していました。”（金静美　前掲 p56）と述べる。日本の石油安全供給政策の中で生まれた丸善石油株式会社の用地造成・建設工事を浅川組のもとで在日朝鮮人は行い、彼らの飯場跡が現在の下津駅裏の在日朝鮮人居住地域になっている。海南市に在日朝鮮人が居住することになった経緯は、1914 年生まれ金命連氏の証言によると“海南へ防空ごうをほりに”集まった人々がそのまま居住したと考えられる。“和歌山市の南端、和歌山と海南を結ぶトンネルを抜けて低い山の際を走る電車の軌跡跡と、同じくトンネルを

抜けた国道 42 号線が合流する、狭い三角地帯”に当時約 10 から 20 世帯の朝鮮人が居住していたことは金命連氏と金鶴祚氏（1924 年生）の証言からも確かなのだが、その理由は明らかでない。これは序章でも述べたように和歌山の在日朝鮮人一世たちが記録を残す余裕もないほど生活が苦しかったことを顕著に示す例の一つであろう。一方、権舜愛氏は朝鮮半島解放後、帰国する資金を得るために縁故を頼り大阪から和歌山を訪れたが、そのまま帰国が叶わず和歌山に居住した在日朝鮮人一世である。また、金命連氏も解放当時子どもが幼く帰国が叶わなかったと証言している。
この節では渡航の歴史について述べたが、たとえ小規模でも朝鮮人が異国の地で集住して独自のコミュニティを形成しようとしているのがわかる。この努力は現在の和歌山朝鮮初中級学校を維持しようとしている和歌山在日朝鮮人コミュニティに通ずるものがあるのではないだろうか。次の節では在日朝鮮人一世の生活と労働に焦点をあて、彼らがどのように暮らし、それと同時に日本社会から迫害されていったのか、またそれに対抗していったのかについて考えることにする。

第二節　在日朝鮮人の生活と労働

在日朝鮮人の労働について考えるより初めに、和歌山の産業の特色について考えなければならない。和歌山、三重は大阪や名古屋の後背地として食料や材木の第一産業、綿製品製造に特化していた。特に紡績業に関しては和歌山在来の特産紋羽織の起毛技術を基礎として新たに考案創成された新興織物である綿ネルはその生産額が 1894 年から 1962 年までほぼ毎年全国一位であり綿織物生産額も高い順位を誇った。また生産された製品を都市や植民地へ送るために輸出路としての鉄道、道路が必要となっていった。つまり在日朝鮮人の主な労働内容は紡績工場での労働から土方へと変わっていったのである。

裵貞知氏によると当時男は土方、女は紡績工場で働くことがほとんどであったという。つまり、紡績工場で働く圧倒的多数は女性であった。前節で述べた在日朝鮮人居住地の他にも日の出紡織株式会社の御坊・松原 2 工場と日高紡績株式会社の工場の付近にも朝鮮人が集住していた。紡績会社は日本語が不自由であった在日朝鮮人労働者の労働力をより円滑に機能させるために夜間寄宿舎において日本語を教えていたという記事が当時の『紀伊新報』や『和歌山新報』に載っている。紡績会社の彼らに対する待遇は劣悪で梁漢淑氏（1903 年生）は“もしやあこ（赤ん坊）でもできたらすぐくびや”と述べており、それゆえ夫と別々に暮らす女工がほとんどであったという。日の出紡織株式会社の寄宿舎にいた当時 28 才の女性が生まれたばかりの幼児を遺棄した罪で取り調べを受けたことは、この境遇と無関係とはいえないであろう。男性の在日朝鮮人労働者もまた冷遇をうけた。彼らの労働内容は上記にも述べたように鉄道敷設、道路改修等の現場での労働であった。だが、当時の工事記録からは彼らの労働状況が記されたものはなく、新聞の事故事件記事からのみ推測できる。1923 年から 1936 年の間『和歌山新報』の紙面のみでの朝鮮人事故死者数は 13 人にのぼり、その事故状況のほとんどがダイナマイトでの爆破作業中などに起こっており、朝鮮人労働者が過酷な労働環境にあったということは明らかである。また、14 才時に渡日し、自身も鉄道敷設工事現場での労働経験のある鄭承博氏（1920 年生）も朝鮮人が道を開き、トンネルを抜いた後に日本人労働者が鉄道を敷いていたと述べている。また、1930 年の昭和恐慌の影響を受け多くの朝鮮人が失業した。その自衛策として 1930 年以降多くの和歌山朝鮮人組合が出現した。

和歌山在日朝鮮人が受けた迫害は雇用者によるものだけではなかった。和歌山との県境にある三重県のトンネル工事に従事していた朝鮮人労働者が、1926 年 1 月、木本の日本人庶民に襲撃され、二人が殺害された木本事件や、1919 年 3 月 1 日の『大阪朝日新聞』の記事にあるような和歌山県日高

郡日高水力電気会社の朝鮮人夫が日本人夫の雪隠に出入りしたことがきっかけで朝鮮人宿舎が襲われダイナマイトで焼き払われる上山路事件などがおこっていた。これらは、日本の植民地主義からなる民族差別的な政策が日本国民の多くに民族差別意識を植え付けることになっていたということの証拠と成りえるだろう。朝鮮人労働者がストライキを起こしたときにも彼らよりわずかに待遇の良かった日本人労働者はストライキに参加することは無かったという記録も残っている。

このような迫害とは違い朝鮮人を蔑称の鮮人でなく彼地人と呼び内鮮融和を目指そうとする動きもあった。この動きは一見朝鮮人への差別をなくそうとするもののように見えるものの、朝鮮人が意図して日本に来たのではない以上朝鮮人と日本人を同一視しようとすることは朝鮮人の民族意識を完全に否定するものであり、直接的な迫害と、本質的にはなんら変わりは無いのだ。

また忘れてはならないのが、渡日した朝鮮人たちが日本の敗戦間際には強制的に連行され戦地へ送り込まれたということだ。金鶴祚氏は”ある日にね、昼、仕事中に、警察隊が、トラックで”やってきて”人間をかたっぱし、トラックに積む”場面を目撃したと述べた。彼自身は若かったため内地の兵士となったが、その時トラックに積まれた人々はサハリンへ連行されたという。金鶴祚氏がこの連行を目撃した 1942 年頃は朝鮮半島で起こった三・一独立運動の日本への波及を恐れ朝鮮人の渡日を厳しく制限していた日本政府が一転、中国侵略の長期化に伴って朝鮮人の強制連行を推し進めた時期である。

上記からも分かるように、和歌山の朝鮮人労働者は労働者としても、朝鮮人としても差別を受けてきた。しかし彼らは時にストライキを起こし、時に日本人と争うことをしてでも抗うことはやめなかったのである。日本社会のなかで朝鮮人コミュニティを護ってきた一世の後を継ぎ、現在でも朝鮮学校を中心とした和歌山の朝鮮人コミュニティは存続している。次からは二世、三世へと世代が変わる中での和歌山朝鮮人コミュニティについて見ていく。

第 3 節　和歌山、在日朝鮮人社会の現状

現在の和歌山県の人口は、984689 人（2016 年）で、朝鮮籍者は 174 人、韓国籍者は 2135 人。近隣の県を見てみると、奈良県は朝鮮籍者 192 人・韓国籍者 3496 人、滋賀県は朝鮮籍者 361 人・韓国籍者 3496 人。和歌山県は、近畿の中でも最も朝鮮人人口が少ない県である。植民地期から解放後の朝鮮人人口をみると、1913 年に 38 人、1925 年に 1943 人、1930 年に 5881 人、1935 年に 8647 人、1940 年に 11298 人、1945 年には 22552 人にまで増えている（金静美、前掲論文参照）。解放後には、多くの朝鮮人が故郷に帰り、1948 年には 5955 人となる。全体的な在日朝鮮人の人口推移と同様に、和歌山県内の在日朝鮮人人口も推移したとみることができる。インタビューの中では、「和歌山 5000 人同胞」という言葉も聞かれ、ある時期までは国籍でみて 5000 人前後の同胞がいたといえる。そこから、人口の自然減に加え、県外への移動や帰化の増加などにより、減少の一途をたどっている。

また、現在朝鮮人人口は、和歌山市内に集中しており、箕島に朝鮮学校が存在したころと比べて紀南地域の人口は大幅に減少している。元々は、JR の紀勢線に沿って多く住んでいたが、河川工事の建設現場や養豚業などの仕事の廃業や職業の転換などを理由に、和歌山市内や県外に移動する傾向が強くなった。特に、1973 年に学校が和歌山市内に移転され、同胞系金融機関である朝銀信用組合の田辺支店が閉鎖されてからは、紀南地域の同胞が集まる場も無くなっていった。紀南地域の同胞は、子どもを朝鮮学校に送る場合、寄宿舎に送るという選択をしなければならなくなった。

朝鮮総聯の地域での活動からみても、元は和歌山市、紀北、紀南、紀中、新宮と、地域での活動もしていたが、現在は和歌山市の学校を中心に市内でのみ行われているのが実際である。和歌山朝鮮初

中級学校の卒業生も、和歌山県内に住まいをかまえることは少なく、仕事の関係上県外で働くようになることがほとんどである。

以上のような現状の中、和歌山県の在日朝鮮人社会は、1970 年代初旬までは箕島に朝鮮学校があったこともあり初島や箕島の地域に同胞が多く住んでいたが、時代の移り変わりとともに和歌山市内が中心となった。同時に朝鮮学校も和歌山に移転し、朝鮮学校が同胞の全ての活動中心となった。

第 2 章　和歌山朝鮮初中級学校の歴史と現状

この章では現在の和歌山朝鮮初中級学校が建設されるまでの歴史と現在の学校の運営状態をふまえた現状について述べる。歴史を述べる第 1 節では姜貞漢氏と申鐘国氏のインタビューを、現状を述べる第 2 節では朴志睦氏のインタビューをもとにしている。姜貞漢氏は 1939 年にかつらぎ市で出生し、「学校閉鎖令」により日本学校へ通うことを余儀なくされた。高校卒業後 3 年ほど「飯場」で仕事をした後、朝鮮大学校の教員養成所の 5 期生として半年を過ごす。そうして箕島の朝鮮学校の教員となり、学校の改修事業でも建設委員会委員長を担った和歌山朝鮮初中級学校の歴史を知る生き証人である。申鐘国氏は京都市の生まれで父親が和歌山朝鮮初中級学校の校長になったのを機に学校に編入した。その後教員として和歌山朝鮮初中級学校に勤務した。朴志睦氏は初級部 2 年生まで和歌山朝鮮初中級学校で学び 1997 年度から教員として勤務、2010 年度には担任職と兼任しながら校長に就任する。

第 1 節　国語講習所から学校、統合へ

1945 年 8 月 15 日の祖国解放後、在日朝鮮人 1 世たちは一刻も早い帰国を願って全国各地に民族教育を目的とした「国語講習所」を設立した。この時代の在日朝鮮人は民族の言葉を奪われた経験がある世代であり、だからこそ 2 度と奪われまいと苦しい中でも死力を尽くして次世代に言葉を教えた。1 世にとって民族とは言葉であり、言葉を教える「国語講習所」は一から築き上げた財産を寄付し、全てをなげうってでも守るべきものであった。国語講習所は和歌山市内にも建てられ、当時の生徒数は 12，3 人だったという。1948 年に「学校閉鎖令」が発令されると、在日同胞たちは民族教育を守るために全国で闘争を繰り広げた。しかし、結果的に学校は廃校へと追い込まれ、非常に苦しい状況が続いた。

そんな中、1953 年に和歌山の初島、箕島、湯浅、新宮、田辺、南部に午後夜間学校が設立される。さらに 1955 年には北手平午後夜間学校が、1957 年には松江午後夜間学校が建てられた。そして幾度かの学校統合を経て、1961 年に和歌山朝鮮初中級学校として出発することになった。

和歌山朝鮮初中級学校は当時、箕島にあった。生徒数は各学年 5 人程度で、全校生徒も 50 人から多くても 90 人台で 100 名を越したことはない。初級部では複数の学年が一緒に授業を受ける「複式授業」が行われていた。さらには校舎の雨漏りがひどく傘をさしながた授業をすることもあるという環境で、運動場はバレーコート一面ほどしかなく運動会は市内の公園で行った。初島におかれた寄宿舎では遠方に住む学生と教員が生活していた。教員は他地方出身が多く、少ない給料の中で生活していていたため同胞や学父母たちが生活を全面的にバックアップしていた。

1970 年には「学校法人 和歌山朝鮮学園」として認可され、さらに和歌山市内に住む学生が多くなったこともあり、学校を統合して新しい校舎を建てることになった。お金が足りず先に箕島の学校を売ってから引っ越したため、一年目はプレハブで授業を行ったが、1973 年に現在の校舎が和歌山市中島に建てられ幼稚園が併設された。1975 年には寄宿舎も建てられた。中島に移転した当時、学校周辺に家はなく田んぼばかりだった。中心地に学校を建てようにも、金銭的に難しかった。1971 年に国体道路が建設されてからは交通の便もよくなり、住宅も増えていった。1995 年には学校の改修事業を大々的に行い、1 億 5 千万円のお金を集め、現在の改築された校舎と寄宿舎が建った。

第 2 節　学校運営の現状と課題

現在、和歌山朝鮮初中級学校の生徒児童は幼稚園と初中級合わせて 33 人、教員は講師を含め全員で 10 人である。教員の数は必要最小限で、学校を運営するうえで、数々の困難がある。学校関係者は学校をどのように運営しているのか。収入としては生徒からの授業料と朝鮮民主主義人民共和国からの教育援助費、行事ごとの賛助金と学校的に行っている事業によるものがある。もともとはそれに加えて県と市合わせて年間 670 万円の補助金があり、補助金が運営費の 3 分の 1 程度を占めていたのだが、今ではそれも支給されておらず学校は苦しい運営を強いられている。

運営費の中では人件費が一番大きな割合を占めているが、教員の給料も遅れている状況にあり、どうにか耐えながら運営しているのが現状である。さらに、校舎と寄宿舎の雨漏りや壁が崩れかかっていることもあり、学校施設の改修の問題が提起されているが、金銭面の問題により修繕ができていない。この現状を打破するために、物資の節約や学校施設の管理を徹底して行っている。さらには一口 1000 円運動を行っており、1500 口を目標にし、それを達成することで人件費の問題を解決するに尽力している。学校の問題については、学父母と討論する機会も設けている。ただ意見を出して終わりではなく、最終的にはより良い学校づくりのためにみんなが同じ方向を向けるよう意識的に討論を重ねている。

今後の課題は、第一に金銭面における問題解決である。そのためには補助金問題に対して絶えず闘争を続けていく必要がある。補助金が支給されていない現実はやはり運営を困難にさせ、学父母の負担も大きくなる。差別に立ち向かい当然の権利として要求すべき問題である。その闘争においては学校関係者だけでなく、私たち大学生も力を合わせて闘っていくべきである。また学校施設の修築や人件費をまかなうための運動も継続していき、地域の同胞とのつながりや心ある日本の方々の支援を大事にしていきたい。ただお金を集めるだけにとどまらず、ネットワークを拡大することも、学校運営をスムーズなものにするための一つの形である。

第 3 章　和歌山朝鮮初中級学校存続の意義と方法

インタビューをする中でよく耳にしたのは、同胞、特にオモニ（朝鮮語で母の意）会が頑張っているという声だ。奈良朝鮮初中級学校との比較も踏まえて和歌山在日朝鮮人コミュニティを見ていく。

第１節　学校を取り巻く現状

２章で述べたように、現在の和歌山朝鮮小中級学校の在学生数は、幼稚班１２人・初級部１５人・中級部６人の総勢３３人となっている。中級部３年生がいないこともあり、学校創立６０周年を迎える来年度には３７人になると見込まれている。もちろん、この数字はまわりの日本学校に比べると圧

倒的に少数であるし、全国の朝鮮学校の中でも少ない部類に分けられる。
ここで注目すべきなのは学生数が少ないということではなく、和歌山朝鮮初中級学校が学生数を維持しているという事実である。参考データとして、学校創立５０周年を迎えた２００８年時の生徒総数は３５人であり、全国の朝鮮学校で生徒数の減少が叫ばれる中、同校は２０００年以降、生徒数３０人以上を維持し続けている。
和歌山の同胞社会を考えるにつれて、似た境遇にある滋賀と奈良がよく挙げられるが、滋賀では２００４年に朝鮮学校の中級部が休校となり、奈良では１９９９年に中級部が、２００８年には初級部が休校となり、今でこそ幼稚班のみでの運営がなされているが、一時学校運営が休止されていた時期があった。大きな原因はやはり経営難にあった。和歌山朝鮮初中級学校でも、他地方と同じく県や市からの補助金を絶たれ、学校運営資金の３分の１を失うこととなった。そんななか、この３県のなかで最も同胞数が少ないにもかかわらず、和歌山では幼稚班・初級部・中級部と体系的な運営が維持され続けている点からも、その維持力がいかに強いかが見て取れる。
和歌山朝鮮初中級学校が体系を維持しながら運営され続けているのは、やはり和歌山同胞たちの尽力の賜物である。１９９０年代後半から奈良や滋賀で休校が余儀なくされる中、和歌山同胞は遠方の方も含め一か所に集まり何度も議論や運動を繰り返し、「学校を守りたい」「学校をなくしてはならない」という志のもと一致団結し、学校運営を維持してきた。そこには、２章で述べたような教員たちや学校側のたゆまぬ努力も含まれている。なかでも特に活発に活動が行われているのがオモニ会である。オモニ会はキムチを作って販売をしたり、各行事で出店する売店での売り上げを学校の支援に充てたり、オモニたちで寄宿舎の子供たちや教員たちの食事担当を分担したりと、学校存続のために力を尽くしている。
オモニ会についてのみ詳しく述べたが、和歌山同胞のなかで愛校心と団結力が共通意識として強く根付いている。この共通意識の高さこそが和歌山朝鮮初中級学校の強さである。

第２節　「同胞社会と学校」

ウリハッキョ。文字通りいえば朝鮮語で「私たちの学校」の意であるが、同胞たちは朝鮮学校に親しみを込めてこう呼ぶ。和歌山に限らず、多くの地域において同胞たちはハッキョを中心に据えて活動し異国において今日まで民族の文化、言葉、歴史を守りコミュニティを強固なものとしてきた。換言すれば、今日のような同胞社会の発展及び維持においてウリハッキョの存在は不可欠であったといえる。

当初ウリハッキョの主な役割は言語教育であった。失われた文化、言語を取り戻すことに重きが置かれた。これが徐々に特に拉致問題が顕在化した後においては自分たちの立場、世界観などに対する教育も盛んにおこなわれるようになった。拉致問題以降同胞社会を離れていった同胞も少なくなく、学校にはコミュニティの強化の役割も要請されるようになった。こうした教育を受けウリハッキョを卒業した人たちが同胞社会の中心的役割を担い。少子化等による同胞の絶対数の減少にもかかわらず創意工夫をもって同胞社会の伝統を維持、継承してきたのである。

教育がまだ幼い学生たちに与える影響はかなり大きい。これはウリハッキョだけでなく教育一般に対していえる事である。ウリハッキョはその教育を通して、いわゆる subject だけでなく、同胞社会そのものに接する機会を与えることで学生たちの同胞社会を考える機会をもうけたのである。

前述のように、同胞社会の中心的役割を担っているのはウリハッキョを卒業した専任の活動家たちであり、また、財政等の面でもウリハッキョを卒業した実業家たちの力は大きい。

このようにみると、ウリハッキョの存在は同胞社会にとって必要不可欠であり、それゆえ同胞社会

はウリハッキョを守るため力を学校に集中させてきた。ウリハッキョの重要性は奈良の事例から見ても明らかである。1970 年 9 月 12 日に創立された奈良初中級学校は“ 1990 年代以降、生徒数は徐々に減少し、1999 年には中級部が大阪の中級部に統合し、2008 年には初級部が休校となった。これに伴い、奈良の同胞社会は急速に縮小し、同胞の組織離れや活動の低迷がより深刻なものとなった”（2012 年　「朝鮮学校存続の意義とそのための提言～奈良朝鮮初中級学校に焦点をあてて～」）。李元志氏（和歌山朝鮮初中級学校卒業生）も“和歌山も中級部をなくそうかという意見も出た。（中略）同じような時期に奈良は中学をなくしてん。ほんで奈良は休校。中学から大阪の学校に行かせるんやったら、小学からでもええやんっていう親が多くて、学生数が減った。多分そんな感じ。和歌山はそん時、踏ん張った”と述べている。どのような状況でも、ウリハッキョを最優先に守ったのは和歌山の在日朝鮮人コミュニティが小さいながらも無くならない理由であろう。

第 3 節　「和歌山朝鮮初中級学校の伝統と強み」

前述のような同胞社会の例にもれず、和歌山同胞社会においてウリハッキョがなした役割も非常に大きい。のみならず、和歌山は同胞の絶対数が関西の他の府県と比較しても少ないことに鑑みれば、今日においても和歌山朝鮮初中級学校の形で中等教育体系を維持していることは特記すべき事実であり、このこと自体が和歌山同胞社会そのものの強みといえよう。ここでは、和歌山同胞社会の根幹をなしているウリハッキョ、和歌山朝鮮初中級学校の伝統と強みを現地の同胞に行った調査に基づきまとめる。

「勉強をよくする学校」和歌山の同胞たちは口をそろえてこう言う。和歌山のウリハッキョは伝統的に勉強に力を入れてきたのだと。また、それは、ソンセンニム（朝鮮語で先生の意）たちの力があってこそ、だといえる。前述の通り和歌山は同胞の絶対数が決して多くない。すべての教員を和歌山出身者で賄うことは不可能である。もちろん和歌山で生まれ、育ち、朝鮮大学校を経て和歌山で教鞭を振っている教員もいるが、和歌山同胞たちは他の地方から来られた教員たちの力が大きいという。また、同時に他地方からきた彼らも同胞であり、ソンセンニムたち自身も和歌山同胞社会の一員として学校のために尽力するのだという。地方を問わず、和歌山の学校に集まる教員たちの中に学習の意義が共有され、それが伝統として今の教員及び生徒にまで受け継がれているのである。

もうひとつの強みとして同胞社会の助け合いがあげられるだろう。また、この助け合いがあったからこそ、前述のような「勉強をよくする学校」という伝統が受け継がれてきたのであろう。今の保護者世代のほとんどは、高校で大阪朝鮮高級学校や京都朝鮮高級学校に進学したのち和歌山に帰ってきた人たちだという。「和歌山に帰ってきたい。」そういう意識が強いのだと申鐘国氏はいう。前述の通り、在日朝鮮人にとってウリハッキョと同胞社会とはほとんど同じようなものである。そうして、帰ってきた同胞たちはウリハッキョにも助けを差しのべる。教員たちが苦しかった時代には同胞たちが教員たちの衣食住を提供したという申鐘国氏の話からも想像に難くない。その助け合いこそが教員を動かし、現在のウリハッキョがあるのである。

「勉強をよくする学校」「助け合い」この二つの言葉をたくさんの同胞が口をそろえて言うことからもこの言葉を和歌山朝鮮初中級学校の伝統、強みを端的にまた正確に表しているといえるのではないだろうか。

第４章　和歌山朝鮮初中級学校存続の可能性と運動に求められるもの

学校を存続していくうえで直面しているのはやはり金銭的な問題である。朝鮮民主主義人民共和国と日本の外交関係の悪化は朝鮮学校の運営状況の悪化に直結する。朴志睦氏のインタビューや和歌山朝鮮初中級学校をとりまく情勢をもとに学校存続に求められるものを探っていく。

第１節　時代の変化と学校運営

2018 年、和歌山朝鮮初中級学校は 60 周年を迎える。1973 年に現在の場所に移転し、1995 年に大きな改修工事をした。1995 年の改修には 1 億 5000 万円のお金を集めた。現在は和歌山に戻り子供を和歌山朝鮮初中級学校に送ろうとする和歌山出身の人々を増やすことが重要だと朴志睦氏は述べる。若い教員が多く、保護者も世代が変わり同胞たちの仕事や生活も変化している。朴志睦氏は、35 歳で校長の重責を担うようになり、教員も多くが 20 代である。

最も大きな課題は財政の問題である。学校の運営費をどのようにするのか。運営費の大きな割合を占めていた和歌山県と市からの補助金が停止され学校の財政が窮する中、教員の数を最小限におさえ、経費を最大限節約することを徹底している。さらに、1995 年に改修した校舎にも修繕しなければならない点も出てきており、財政面からすると危機的な状況にあるといえる。

この問題を解決するために、和歌山の同胞は「一口 1000 円運動」を展開している。広い同胞の力を集結させ、学校の運営を安定させそうとしているのである。それは学校の修繕を実現するための活動であり、厳しい中での運営費の問題を何とか解決するための活動でもある。お金の問題は最も厳しく重大な問題であるが、単なる運営のための手法ではなく、同胞のネットワークを改めて構築しなおす作業でもあり、人と顔をあわせて話をする活動の原点に立ち戻ることでもある。

また、学校のことに対して、全同胞的に討論する機会を意識的に作っている。みんなが同じ目標に向かうためにも、学校の問題を保護者や理事会での討論を深めることを伝統的に行っており現在メンバーが変わりながらも続けている。

和歌山朝鮮初中級学校の 50 年間で卒業生は約 350 人で、60 周年の時点でも 400 人に満たない。学生数は現在、幼稚園から中級部まで合わせて 33 人。50 周年の時は 35 人と、学生数を維持している。学校の移転（1973 年）、改修工事（1995 年）と時代の変化とともに学校も変化してきた。改修工事からさらに 20 年以上経った現在、これから学校をどのように維持し発展させていくのか。60 周年を目前に控え、10 年 20 年先を見据えた活動が求められる。

第２節　制度の是正と支援の輪

2017 年 3 月、和歌山市は 1986 年から毎年教育振興のために交付されていた和歌山朝鮮初中級学校への補助金交付を停止した。その理由として、①文部科学省による「朝鮮学校に係る補助金交付に対する留意点について」の通知を受け、②朝鮮民主主義人民共和国による核実験などを踏まえ、③学校の決算報告に「祖国からの援助費」があったため、市は今年度分（2017 年現在）として予定していた補助金 140 万円の交付を取りやめた。また、和歌山県は 2002 年度より朝鮮学校に対して年間約 226～500 万円の補助金を交付していたが、2015 年、235 万円を予定していた補助金を取りやめた。

それを受け、和歌山弁護士会会長は「《朝鮮学校に係る補助金交付に対する留意点について》の撤回を求めるとともに、学校法人和歌山朝鮮学園に対する補助金の適切な交付を求める会長声明」を発表した。その中で、和歌山朝鮮初中級学校への補助金交付の執行停止措置に対し、日本国憲法２６条１項

や文化的権利に関する国際規約１３条、子どもの権利条約２８条において、朝鮮学校に在籍する子供たちの教育を受ける権利を侵害するものであり、日本国憲法１４条１項などの平等原則に反する差別行為とし、和歌山朝鮮初中級学校に対する補助金予算の執行の継続を求める署名運動を全国的に行った。

朝鮮学校の子どもたちの教育を受ける権利や民族教育を守る運動の範囲は、同胞だけに限ることなく、多くの日本人と共に活動してきた。その代表的な活動団体として、「朝鮮学校を支援する県民の会」がある。この会には、大学教員、元教員、弁護士、住職などが参加しており、和歌山朝鮮初中級学校で行われる同胞大運動会や芸術祭その他対外行事に参加するだけでなく、日本社会での朝鮮学校への理解を求める活動を積極的に行っている。こうした、日本人による、朝鮮学校への支援の輪が広がってきた。毎年行われる対外公開授業では、授業や保育を一般の方々にも公開し、民族教育への関心を集め、納涼大会や、花見では近所に住む地域住民も共に参加し、交流の輪を広げている。また、女性同盟が主となり「朝鮮学校に気軽に入れる環境作り」のため独自に行っている校舎講堂でのヨガ教室、朝鮮料理教室など、多様な形で活動を行っている。

このように、行政に対する抗議行動や働きかけを絶えず行っていくとともに、日本人に朝鮮学校の実情を知らせ、朝鮮学校への理解を深める運動を幅広く行っていく必要がある。

第３節　「子どもたちのために」

“和歌山朝鮮初中級学校では、「ウリハッキョを好きになり、《ウリハッキョのために》という気持ちを学生が持てるようになるような教育を目標にしてきた。子どもたちの愛校心を育てること。和歌山ハッキョの卒業生であるという自負心を持てるように、和歌山に帰って来たいという学生を育てること。」を目標に教育を行ってきた”と朴志睦氏は述べた。

教員が１人１人の学生と向き合い、１人１人に求められることに応えてきた。学生数が少ないということで、やりたいクラブ活動ができない、学級構成の男女比率などあらゆる問題に学生、父兄と一緒に向き合ってきた。すべて「学生のために」という気持ちで、難しくてもどうにか実現させようと努力し、試行錯誤を繰り返しながら実践されてきた。このような献身的な教員の努力もあり、現在、在校生保護者の 80%以上が和歌山朝鮮初中級学校出身生ということをみても、「和歌山に戻ってきたい」「和歌山ハッキョに自分の子どもを入れたい」と思う卒業生が多いということが分かる。

“ウリハッキョを作ってきたオルシン（老人への朝鮮語の敬称）たちを忘れたあかん”と李元志氏は言う。日本社会での民族教育存続の難しさに押されている自分たちの力不足を痛感すると言われながら、その言葉には、和歌山朝鮮初中級学校、朝鮮学校への可能性や期待が込められている。自分たちはまだまだ。「もっとできる！」という意気込みを聞くことができた。一世・二世たちの歴史を継承するためにも今回の研究活動を資料として残すことが求められる。

学校運営において困難な点が多々あるが、インタビューを行う過程で、「子どもたちへ一言」という質問に、多くの人が「勉強することへの重要性」を答えた。朝鮮学校は第一に教育の場である事を忘れてはいけない。民族について学ぶ子どもたちのために、教育の質を高めていく必要がある。「子どもたちのために」、そこに通う主役である生徒・園児のために教員・保護者・地域同胞が尽力し多くの支援の輪を広げてきた歴史がある。学校の改修事業、オモニ会や「一口 1000 円運動」などから見て取れるように、ウリハッキョの問題は教員や保護者だけでなく、同胞たち全員で取り組んできた。李元志氏の“毎日コーヒー一杯我慢するだけで、ひと月 3000 円できるねん”という言葉からもウリハッキ

ョへの支援がいかに同胞たちの生活に根付いているかも分かる。
和歌山をはじめ全国各地の朝鮮学校をまず「子どもたちのために」存続させなければならない。そして在日朝鮮人だけでなく日本社会のためにも存続させなければならない。ウリハッキョはまさに朝鮮人コミュニティの象徴であり、その歴史は在日朝鮮人史の象徴であるからだ。“ダイバーシティ”が叫ばれる今の日本社会でウリハッキョが持つ意味は大きい。同胞全体でウリハッキョを支援する在日朝鮮人の輪を在日朝鮮人だけでなく多くの日本人にも広めるために、特に大学生をはじめとした青年たちの行動力が必要になってくるのではないだろうか。

終章

和歌山朝鮮初中級学校を中心に、和歌山の在日朝鮮人社会について論じた。日本による植民地期に有田市や田辺市、勝浦や新宮も含め紀南地域に在日朝鮮人が多く住むようになり、朝鮮学校も箕島が中心であった時期から、現在の和歌山市に移転し、職業の変化もあいまって同胞も和歌山市を中心に多く生活するようになった。和歌山県内の人口自体が少なくなり、同胞の人口もますます少なくなる中でも、朝鮮学校を中心とした同胞コミュニティは維持されてきた。学校存続の危機、学校の中級部休校の問題が提起された際にも、他県においては学校自体が休校や中級部の廃止へと進んでいく中、和歌山では「学校を絶対に潰してはいけない」という強い意志のもと、初中級学校が存続した。

現在、時代の変化と同時に、和歌山県と市の補助金が停止され、学校運営が極めて困難な状況の中でも、ぎりぎりの人員かつ多くの同胞の献身的な取り組みのもと維持されている。そこには、和歌山の同胞社会、朝鮮学校の伝統というべき教育の力と団結力がある。教員が学生たちと向き合い、同胞たちが学校の問題と向き合う。学年に２人や１人しか在籍していなくても創意工夫を凝らし、時間と労力を割いて新たな実践を次々に行う。大きな課題が提起される際には、同胞たちが集まり討論する。学校を守るためにどれだけの力が結集されてきたのかということを痛感する。「今学校が存在すること自体が奇跡」と言われた女性同盟顧問の言葉はまさにその通りである。だからこそ、学校に通う学生、園児たちが学校をこよなく愛し、多くの卒業生が和歌山に戻ってきたいという気持ちを持つようになる。

和歌山の同胞社会、朝鮮学校の力はまさに教育の持つ力の現れであるといえるのではないだろうか。「民族教育は在日朝鮮人社会の生命線である」ということを体現している。

最後に、同胞人口＝朝鮮・韓国籍者数と見ざるを得ないのが現状である。そこには日本国籍者や親の国籍が異なる「ダブル」の人は入らない。日本の政府や社会における差別、朝鮮に対するバッシングなどの影響により、在日朝鮮人が自らのアイデンティティを肯定することが困難な状況にもある。そのような中、和歌山の在日朝鮮人たちが積み重ねてきた実践と実績は、必ず歴史に残されなければならないし、より多くの朝鮮人がつながりを持つことのできるような環境を作り出さなければならない。そのためにもより多く、より深く研究し活動することが求められる。

本論文作成のために、多くの方々の協力をいただいた。特に和歌山同胞のインタビューなしには書くことができなかった。朝鮮総聯和歌山県本部の梁中協委員長と、和歌山朝鮮初中級学校の朴志晙校長先生にはインタビューに応じていただいたとともに、和歌山の同胞社会について全体像を知り、イメージするうえで大きなヒントをいただいた。さらに、その他７名の方々の長時間にわたるインタビューが論文を構成するうえで重要な要素となった。和歌山内の朝鮮学校の近くに住み、長年同胞社会に

関わり学校を支援し続けてこられた姜貞漢氏は、幼少期の同胞の生活や自身の生い立ちから学校の事業まで、多岐にわたりお話をしていただいた。長年女性同盟の委員長を務められた李華鮮氏には、女性たちの活動を中心に和歌山の同胞社会の伝統的な強みについて教えていただいた。和歌山朝鮮初中級学校の教員を経験され子ども 3 人を朝鮮学校に送った申鐘国氏には、箕島時代の学校や 1973 年の移転についてなど、学校の事業を中心に話していただいた。幼少期を和歌山の有田市で過ごされ、現在大阪に住まれている尹美生氏には地域での自身の経験や夫や子どもたちの話をしていただいた。現在も田辺市に住み、5 人の子どもを全員和歌山市の学校に送った金哲浩氏には、紀南地域の同胞たちのことについて、同胞社会のつながりの強さについて話していただいた。来年迎える 60 周年記念行事の実行委員長を務める李元志氏は、これからの学校のあり方や自分たちの運動のありかたについて熱くお話いただいた。現在和歌山朝鮮初中級学校にて社会科教員をされている崔由紀氏からは、和歌山の同胞社会について研究するうえでの貴重なアドバイスをいただいた。その他、活動や各種行事の際に本当に多くの和歌山同胞の支援をいただいた。そうした暖かい応援無しにはこの論文は成立しなかっただろう。そうした人たちに感謝の意を表するとともに、不足点を省みながらさらなる研究の深化を決意する次第である。

インタビューを通じて浮き彫りになったことは、和歌山同胞社会の団結力と学校の持つ教育の力の強さである。同胞が少なくても、学校が同胞たちの中心となり、みんなの強い意志と力でそれを支える伝統があり、それが現在までとぎれることなく受け継がれている。

資料の少ない中、インタビューの内容一つ一つが新鮮で驚くような内容であった。これから、インタビューの内容をより精査するとともに、何度も繰り返す必要がある。そこから出発し、史料自体を発掘していくことも求められる。

表 1

人口数			
1910 年	2,246	1928 年	238,104
1911	2,527	1929	275,206
1912	3,171	1930	298,091
1913	3,635	1931	311,247
1914	3,542	1932	390,543
1915	3,992	1933	456,217
1916	5,637	1934	537,695
1917	14,501	1935	625,678
1918	22,262	1936	690,501
1919	28,273	1937	735,689
1920	30,149	1938	799,878
1921	＊37,271	1939	961,591
1922	59,744	1940	1,190,444
1923	80,015	1941	1,469,230
1924	118,192	1942	1,625,054
1925	129,870	1943	1,805,438

1926	143,798	1944	1,901,409
1927	171,275	1945	＊1,968,807

【参考文献】

金静美「和歌山・在日朝鮮人の歴史」(『在日朝鮮人史研究』第 14 号 1984 年 11 月)

「大阪民族教育６０年誌」(大阪民族教育６０年誌編集委員会　2005 年)

鄭承博「鄭承博著作集第一巻　裸の捕虜」(新幹社　1993 年)

「朝鮮学校存続の意義とそのための提言～奈良朝鮮初中級学校に焦点をあてて～」
(2012 年 コリアン学生学術文化フェスティバル　テーマ別論文)

田中宏、板垣竜太『日韓新たな始まりのための 20 章』(岩波書店　2007 年)

【インタビュー協力者】

姜貞漢氏　　在日本朝鮮人総聯合会　和歌山県本部顧問
梁中協氏　　在日本朝鮮人総聯合会　和歌山県本部委員長
朴志暾氏　　和歌山朝鮮初中級学校 校長
崔由紀氏　　和歌山朝鮮初中級学校 教員
李華鮮氏　　在日本朝鮮民主女性同盟 和歌山県本部　前委員長
申鐘国氏　　和歌山朝鮮初中級学校　元教員　和歌山市在住
金哲浩氏　　和歌山朝鮮初中級学校卒業生　田辺市在住
李元志氏　　和歌山朝鮮初中級学校卒業生　和歌山市在住
尹美生氏　　和歌山朝鮮初中級学校　元教員　大阪市在住